

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K03225

研究課題名(和文) かくれキリシタンの近代における変化と文化遺産化に関する民俗学的研究

研究課題名(英文) A Study on the Alteration of Kakure Kirishitan (Hidden Christian) in the Modern Times and the Influence of the World Heritage Registration

研究代表者

才津 祐美子 (SAITSU, Yumiko)

長崎大学・多文化社会学部・教授

研究者番号：40412613

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、まず長崎市外海地区のかくれキリシタンの近代における変遷と現状について明らかにした。近代以降、かくれキリシタン習俗は変化してきたが、その一方で当事者は、根本的なところ(信仰のあり方)は変わっていないと認識していることもわかった。次に、「長崎の教会群」/「潜伏キリシタン関連遺産」の世界遺産登録運動が活発になるにつれて、現存するかくれキリシタンにも注目が集まって実質的に構成資産のような扱いを受けるようになり、当事者たちの意識にも影響を与えていることが聞き取り調査から明らかになった。さらに、「潜伏キリシタン関連遺産」世界遺産登録の意義とともに、推薦書の問題点や今後の課題について考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、(1)長崎市外海地区のかくれキリシタンの近代における変遷と現状、(2)かくれキリシタン習俗の文化遺産化、(3)「潜伏キリシタン関連遺産」世界遺産登録の意義と問題点、を明らかにした。

(1)と(2)の前半は先行研究では見られなかった視点からのアプローチと調査結果であり、(2)の後半と(3)は研究期間に起きたことを即時的に調査・分析したものであるため、全体として新規性・独創性が高く、学術的意義も大きい。また、研究成果の一部はすでに書籍等で公開しているが、本研究課題は社会的な関心が高く、新聞やTEDx、市民向けの講座など様々な形で公表してきた。したがって、社会的意義も大きいといえる。

研究成果の概要(英文)：In this study, I clarified the alteration in the modern times and the present conditions of Kakure Kirishitan (Hidden Christian) in Sotome region (Nagasaki city). The manners and customs of Kakure Kirishitan have changed in modern times. On the other hand, Kakure Kirishitan recognize that the essence of the faith has not changed. As the world heritage registration campaign became active, Kakure Kirishitan came to attract attention and be treated as one of the components of the property in effect. I revealed the influence of such treatment on their consciousness.

Furthermore, I pointed out the significance of the world heritage registration of "Hidden Christian Sites in the Nagasaki Region" and analyzed the problems of its letter of recommendation and future issues.

研究分野：文化人類学・民俗学

キーワード：文化遺産 世界遺産 かくれキリシタン 潜伏キリシタン関連遺産 外海地区

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

江戸時代から明治初頭にかけての約 260 年もの間、密かにキリスト教の教えを受け継いでいた人々(「潜伏キリシタン」と表記する)がいたことや、禁教令撤廃後も潜伏時代の信仰形態を保持し続けている人々(「かくれキリシタン」と表記する)がいるという事実は、宗教学や文化人類学・民俗学をはじめとする多くの研究者の耳目を集めてきた(田北 1954 など)。ただし、それら先行研究の多くは、かくれキリシタンの調査をしつつも、そこから潜伏時代のキリシタンの在り方を究明することに力点がおかれていた。それは近年の研究においても変わらない傾向である(中園 2015)。しかし、研究代表者が近年行ったフィールドワークの際に気づいたのは、近代以降かくれキリシタンは大きく変化しているということだった。

また、戦後かくれキリシタンの数は減少していくが、所属していた組織が解散してしまった人々の中には、秘蔵していたものを博物館等に寄贈する人も少なくない。平戸市生月島のかくれキリシタンにおいては、1990 年代後半から博物館や劇場で観客を前にオラショ公演を行う動きが活発化している。さらに、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」(以下、「長崎の教会群」)の世界遺産化の流れの中で、かくれキリシタンは構成資産ではないにもかかわらず、マスメディアからは実質的に関連遺産として扱われ、取材依頼やテレビ出演が相次いでいる。こうしたいわば「かくれキリシタン習俗の文化遺産化」が近年急速に進んでいることは看過できない事象である。「長崎の教会群」の世界遺産化に関しては、宗教関連施設を観光資源化することの問題を取り上げた研究がいくつか存在する(山中 2012; 松井 2013)が、現存するかくれキリシタンとの関係についての研究は行われていなかった。また、かくれキリシタン習俗自体の文化遺産化に関する断片的な報告もある(松井 2013)ものの、それを正面から捉えた研究も行われていない。

一方、研究代表者は、近代以降の文化政策や学知による地域文化の表象や行政および地域住民による文化の資源化を主な研究課題とし、フィールドワークによる聞き取り調査と文献資料調査を組み合わせて研究してきた(才津 2015 など)。こうした研究から見てきた問題の一つが、「生きている文化」を文化遺産として継承していくことへの政策的要請の高まり(理念)と、担い手たちが直面するさまざまな困難(実践)との乖離である。本研究で取り上げたかくれキリシタンをめぐる文化遺産化の問題もまた、こうした生きている文化の遺産化に伴う困難さを多分に秘めたものである。

2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、かくれキリシタンの近代以降の変化について明らかにすることである。また、「長崎の教会群」の世界遺産化に伴って加速している「かくれキリシタン習俗の文化遺産化」の実態を明らかにすることが本研究の第二の目的である。

3. 研究の方法

本研究は、以下の通り、聞き取り調査と文献資料調査を組み合わせて行った。

- (1)長崎県内数カ所(長崎市外海地区・平戸市平戸島および生月島)において現地調査を行った。なかでも長崎市外海地区では調査期間中を通して聞き取り調査を行い、「外海のかくれキリシタン」の近代における変遷と現状について明らかにした。
- (2)「長崎の教会群」(2017 年に名称変更され「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」になった。以下「潜伏キリシタン関連遺産」)世界遺産登録前後の長崎県内のさまざまな取り組みとその影響について、長崎県庁をはじめとする地方公共団体や観光関連団体の動向を調査・分析するとともに、外海地区で聞き取り調査を行った。
- (3) (1)(2)と並行して、近代以降の潜伏/かくれキリシタン研究および「長崎の教会群」/「潜

伏キリシタン関連遺産」に関する文献資料を調査・分析した。

4. 研究成果

本研究によって以下の点が明らかになった。

(1)長崎市外海地区のかくれキリシタンの近代における変遷と現状

禁教令撤廃後、外海地区の潜伏キリシタンはカトリックに復活するものとそのままの習俗を維持するかくれキリシタンに二分された。またかくれキリシタンの中でも、寺と近世以来の関係を続ける「寺付き」と寺との関係性を絶った「寺離れ」とに分かれた。第二次世界大戦後、帳方（かくれキリシタンの最高役職者）の後継者がいなくなった寺付きグループは、他の帳方がいる寺付きグループに合流して信仰を続けたが、最後の帳方がいなくなってからは、かくれキリシタンの習俗をやめて寺との関係を続けており、「仏教徒になった」といわれている。一方、寺離れグループは、西出津町と下黒崎町に一つずつ現存している。ここまでの流れで興味深いのは、寺付きグループの帳方がいなくなった際、カトリックにならなかったのはもちろん、寺離れグループに合流した人がわずかだったことである。これまでの先行研究で、かくれキリシタンがカトリックに復帰しなかった理由についていろいろと推測されてきたが、外海地区の場合、復活時、そしてその後の人間関係のもつれが、後々の信仰の選択にまで関わっていることが明らかになった。

また、外海のかくれキリシタンは近年急速にカトリック化していると見なされている（宮崎2014）が、それは下黒崎町の村上家が帳方を務めるグループのことを指している。このグループが下黒崎町で唯一現存する寺離れグループである。とりわけ、先代の帳方だった村上茂さんは、多くの改革を行った。オラシヨの文言を代々伝わっていたものから日本に伝わった初期のものに復元（変更）したり、オラシヨを声に出して唱えるようにしたり、カトリックの勉強をして作法を取り入れたりしたほか、神父とも親交を深めた。黒崎教会に赴任していた野下千年神父の呼びかけに応じて2000年からはじめた枯松神社祭もそうした親交の賜である。茂さんが行った改革は後継者の茂則さん（現帳方）にも受け継がれている。茂則さんはまた、マスメディアや研究者の取材、講演会の依頼等も数多く引き受け、対外的にもかなりオープンになっている。

ただし、茂則さんは、茂さんが取り入れたカトリック的作法を一代前のものに戻したりもしている。また、茂則さん自身の認識としては、茂さん以降に進んだ変化は表面的なものであり、根本的なところ 信仰のあり方 は先祖代々継承されてきたものとなんら変わりはないという。「伝統」とは何か、「変化」とは何かを考えさせる、非常に示唆に富む話である。

(2)かくれキリシタン習俗の文化遺産化

「長崎の教会群」世界遺産登録運動は、2000年からはじまった。2007年には暫定リストに掲載され、これを期に長崎県内の政財界および県内各地の構成資産候補地を中心に世界遺産登録に向けて様々な取り組みを行ってきた。構成資産の見直しも行われ、禁教期（潜伏期）を示すものとして、平戸島の聖地と集落（春日集落、安満岳、中江ノ島）が加えられた。このような中で現存するかくれキリシタンにも注目が集まっていった。マスメディアの取材内容から、かくれキリシタンが潜伏期の姿を今に伝えるものとして扱われていることがよくわかる。ちょうど2000年から下黒崎町では枯松神社祭が行われるようになっていたこともあって、枯松神社もまた潜伏期以来のキリシタンの聖地として知名度が上がっていった。さらに、ICOMOSの中間報告の結果を受けて「長崎の教会群」の推薦が取り下げられ、潜伏期に焦点があてられる形で価値づけが変更され、名称も「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」に変更されると、かくれキリシ

タンがより一層注目を集めるようになった。外海地区では「外海潜伏キリシタン文化資料館」が新設されたり（2017年）村上茂則さんがイベントに呼ばれたりする機会が増えた。平戸市生月島でもかくれキリシタンへの取材が相次いでいる。名称が「潜伏キリシタン関連遺産」に変更されても、かくれキリシタンが構成資産に含まれるようになったわけではないが、実質的に構成資産のような扱いを受けるようになったといえる。当事者たちもまた自分たちこそが潜伏キリシタンの伝統をそのまま今に受け継ぐ存在なのだという自負を抱いていることが聞き取り調査からも明らかになった。

(3) 「潜伏キリシタン関連遺産」世界遺産登録の意義と問題点

本遺産登録の意義は、なんといっても日本の世界遺産初のキリスト教関連遺産だということにある。このことは日本文化の多様性を示す上でも重要な意味を持つだろう。本遺産には、他にもこれまで登録されてきた日本の世界遺産とは大きく違うところがある。それは「物証」（不動産）よりも「独特の文化的伝統の在り方」といういわば無形の文化遺産に「顕著な普遍的価値」が見いだされていることである。もちろん、これまで登録されたどの遺産も無形の価値を含んでいた。しかし、本遺産はそのウエートがかなり大きい。それを可能にしたのは、文化財保護法における文化的景観保護制度の大胆な流用である。重要文化的景観に選定された範囲を「集落」と捉え、集落内にある未指定の史跡や有形文化財（動産を含む）までも構成資産の価値づけに利用したからこそできたことだった。潜伏キリシタンの物証の少なさからきた苦肉の策ではあるが、物証優先ながら文化的多様性の体現を模索している世界遺産全体にとっても何らかの示唆を与える事例になるかもしれない。

一方で本遺産には問題点や課題も多い。具体的には、「潜伏キリシタン関連遺産」という名称の文化遺産であれば入っていてしかるべきものが構成資産として含まれていないこと、ストーリーに無理が生じていること、かくれキリシタンの位置づけ、管理運営、の4点があげられる。以下、簡潔に説明していきたい。

まずだが、世界遺産登録後、「なぜ は構成資産に入っていないのか」という声をよく耳にする。 に入るのは、「日本二十六聖人殉教地」「浦上」「枯松神社」が多い。これらは長崎におけるキリシタンの歴史を語る上で非常に重要な場所である。しかしながら、いずれも現状では構成資産にはなり得ないものだといえる。なぜなら、それらは国指定の文化財にはなれないからである。つまり、これらが構成資産に入っていないことは長崎の人々にとってかなり違和感があるのだが、制度上難しいのである。これは世界遺産の制度上の あるいは、日本の運用上の限界だともいえる。

は、点在する構成資産をつなぐストーリーに一貫性を持たせるために、歴史が再解釈されていることを指している。またこれは教会を中心に選んだ構成資産の見直しを行わなかったことの弊害だともいえる。それが端的に表れているのが、島嶼部に点在する構成資産の説明である。12ある構成資産のうち、5つが島嶼部に点在する「集落」なのだが、それらは18世紀末～19世紀初頭に藩主導で行われた政策を契機として、外海地区から五島列島等に住民が移住し、形成されたものである。このことに対して、推薦書（文化庁文化財部記念物課世界文化遺産室 2017）等では、潜伏キリシタンが非常に主体的かつ戦略的に信仰を維持できそうな場所を選んで移住し、既存の集落ともうまく共存していたと説明している。しかし、それはこれまでの研究で明らかにされてきた歴史とは異なるものである。この他歴史に関しては、「負の遺産」としての側面に関する記述の希薄さについても指摘されている（西出 2018）。

次にだが、推薦書（文化庁文化財部記念物課世界文化遺産室 2017）では、カトリックへの

復活をもって潜伏キリシタンの伝統は終焉したと述べられている。そして、かくれキリシタンが継承している「伝統」は、禁教令撤廃後から現在の間までに変容してしまっていると書かれている。それにもかかわらず、マスメディアだけでなく行政もかくれキリシタンを禁教期の伝統を体現している存在として扱うというダブルスタンダードが見受けられる。また推薦書の記述は(1)で述べた当事者の認識とも異なるものである。これはやはり問題だろう。これもまた固定された構成資産の枠内でわかりやすいストーリーを展開するために歪曲されたものと推測される。

最後の 管理運営の問題は、～ とは全く違う種類のものだが、構成資産の将来と直接の担い手にとっては非常に深刻なものである。UNESCO は近年、遺産の管理運営における地域コミュニティの関わりを重視している。本遺産でも地域住民による自主的な活動が期待されているが、人口減少が著しい地域が多く、住民にかなりの負担がかかることが予想される。また、信仰という要素が絡むため、単にそこに住んでいるだけでは主たる担い手とはなり得ない人々もいることに注意が必要だろう。ただし、登録後の文化遺産にはしばしば公共性が求められるため、これからの管理運営・活用にはさまざまな主体の参入が考えられる。観光開発においては地域外の事業者ばかりが携わるといった事態が生じることも想像に難くない。どのような管理運営・活用の在り方が望ましいのか、すべてはこれからの課題である。

(4)研究成果の位置づけ・インパクトと今後の展望

(1)～(3)で本研究の成果を見てきた。(1)と(2)の前半は先行研究では見られなかった視点からのアプローチと調査結果であり、(2)の後半と(3)は研究期間に起きたことを即時的に調査・分析したものであるため、全体として新規性・独創性が高く、学術的意義も大きい。また、研究成果の一部はすでに書籍等で公開しているが、(2)(3)に関しては社会的な関心が高く、新聞や TEDx、市民向けの講座などさまざまな形で社会に還元する機会が多かった。したがって、社会的意義も大きいといえる。

最後に、世界遺産登録後の外海地区の様子について述べたい。世界遺産登録の効果はすぐに表れ、各地の構成資産を訪れる観光客数は顕著に増加している。しかし、外海地区で行った聞き取り調査からは、地元政財界の期待やマスメディアの注目度とは裏腹に、観光客数の増加を地域の活性化にうまく結びつけられていない現状が見えてきた。「生きている遺産」(リビングヘリテージ)の保存と活用を考える上では、やはり現地に暮らす人々の意向・行動が鍵となる。本研究課題は今年度で終了するが、今後も継続的に調査・研究していく予定である。

参考文献

- 宮崎賢太郎 2014 『かくれキリシタンの実像 - 日本人のキリスト教理解と受容』 吉川弘文館
- 中園成生 2015 『かくれキリシタンとは何か』 弦書房
- 山中弘 2012 『新しい巡礼の創出:長崎カトリック教会群の世界遺産化』 『宗教研究』85(4) pp. 1346-1347
- 松井圭介 2013 『観光戦略としての宗教』 筑波大学出版会
- 才津祐美子 2015 『『白川郷』で暮らす - 世界遺産登録の光と影』 鈴木正崇編 『アジアの文化遺産 - 過去・現在・未来』 慶應義塾大学東アジア研究所
- 田北耕也 1954 『昭和時代の潜伏キリシタン』 日本学術振興会
- 西出勇志 2018 『負の歴史に目を凝らそう』 『長崎新聞』 7月7日付
- 文化庁文化財部記念物課世界文化遺産室 2017 『長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産 世界遺産登録推薦書』

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 才津祐美子
2. 発表標題 「潜伏キリシタン関連遺産」の問題点と今後の課題 - 長崎市外海地区を中心に -
3. 学会等名 日本民俗学会第71回年会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 青木浩幸、海蔵寺大成、ウィリアムズ,マーク、才津祐美子、首藤明和、スティール,M.ウィリアム、高崎 恵、高松香奈、中村桂子、西村幹子、葉柳和則、毛利勝彦	4. 発行年 2020年
2. 出版社 長崎文献社	5. 総ページ数 170
3. 書名 平和の翼と波を広げる - 現在・過去・未来 -	

1. 著者名 木村直樹、王維、山口響、山口華代、葉柳和則、東條正、森川裕二、石塚真由美、林美和、才津祐美子、 滝澤克彦、須田牧子、野上建起、深瀬公一郎、岡本健一郎、矢田純子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 320
3. 書名 大学的長崎ガイド - こだわりの歩き方	

1. 著者名 飯田卓、阿部朋恒、岩崎まさみ、兼重努、川瀬慈、才津祐美子、笹原亮二、清水拓野、管豊、高倉健一、 長谷川清、日高真吾、俵木悟	4. 発行年 2017年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 408
3. 書名 文化遺産と生きる	

1. 著者名 上島智史、木村至聖、才津祐美子、桜井厚、四條知恵、新木武志、富永佐登美、葉柳和則、阪野祐介、平野健一郎	4. 発行年 2017年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 325
3. 書名 長崎 - 記憶の風景とその表彰	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>(1)新聞記事 著者名：才津祐美子、記事のタイトル：「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」世界遺産登録の意義と課題、掲載紙：『熊本日日新聞』、『東奥日報』、『長崎新聞』、『神奈川新聞』、『中國新聞』、掲載年月日：2018年7月5日～13日</p> <p>(2)講演 発表者：才津祐美子、講演内容：長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産、場所：TED X Saikai、発表年：2018年 発表者：才津祐美子、講演題目：なぜ枯松神社は世界遺産になれなかったのか？、場所：市民セミナーヨ2018、発表年：2019年 発表者：才津祐美子、発表標題：世界遺産と外海、場所：純心大学長崎学研究所主催「長崎学講座」、発表年：2019年</p> <p>(3)シンポジウム 発表者：才津祐美子、発表標題：「潜伏キリシタン」世界遺産登録の影響と今後の課題、場所：長崎大学・国際基督教大学共同研究シンポジウム「平和の翼と波を広げる - 現在・過去・未来 -」、発表年：2019年</p>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考